

# 『星の王子さま』

—その対話に含まれる思想—

天野直美

## 目次

はじめに

### 序章

第一節 作者について

第二節 『星の王子さま』出版について

第一章 飛行士と王子さまとの対話

第一節 飛行士との出会い

第二節 王子さまの秘密

第二章 星への旅

第一節 バラについて

第二節 へんな大人たちの星

第三章 キツネとの対話

第一節 銅いならす

第二節 心で見なくちゃものごととはよく見えない

第四章 飛行士と王子さまとの対話

第一節 井戸を探す

第二節 飛行士との別れ

おわりに

## はじめに

私が、はじめて『星の王子さま』に出会ったのは、小学校二年生の夏休みだった。いとこにすすめられて読んだのだが、意味がよくわからなくて途中でやめてしまった。その後、何度か読もうと思ったのだが、最初のウワバミの絵の話になじめず、そこからさぎの話に興味もてず、途中で読むのをやめてしまった。

短大に入学してから、読んだ『世界児童文学100選』という本の中で、『星の王子さま』が紹介されていた。そこに、ゾウをこなしているウワバミの絵の話がのっていて、私はそこに興味があつて、『星の王子さま』を読んだ。

この本は本当に大切なものをするし、そのことがわからない大人を痛烈に批判したものだ。私は、今まで生きてきて、何か大切なものを忘れてきたのでは？という思いにかられた。文中の「りっぱな家」の定義をおとなの人は十万フランの家のことを考え、子どもは桃色のレンガでできていて、窓にジェラニウムの鉢がおいてあつて屋根の上にハトがいる家と考えるように、私も、物の本当の素晴しさをまちがったフィルターで見ているように思った。そして、そう気づいた今ならば、忘れてしまった大切な何かをとりもどせる

のではと思つた。

卒業論文のテーマに、この作品を選んだのは、いまのべた理由からである。そして、王子さまとさまざまな人々との対話の中より、本当に大切なものを探つてゆきたいと思う。

## 第一節 作者について

サン・テグジュペリ(本名 アントワヌ・ド・サン・テグジュペリ)は、一九〇〇年六月九日 リヨンで生れた。十歳までの幼年期は、母方の祖母所有のヴァール県のモール城館と叔母トリコー夫人所有の、アンペリュに近いサン・モリス・ド・レマンの城館とを、交互に行き来した。このサン・モリス・ド・レマンの城館をサン・テグジュペリは、「ほくの心の中に、のどかな糧を徐々に蓄えた古い家」と呼びながら、折りあるごとになつかしんだ。また、

『星の王子さま』の中に、——ほんの子供だったころ、ぼくは、ある古い家に住んでいたのですが、その家には、なにか宝が埋められているという、言い伝えがありました。もちろん、だれもまだ、その宝を発見したことはありませんし、それを探そうとしたこともないようです。でも家じゅうが、その宝で、美しい魔法にかかっているようでした。ぼくの家は、その奥に一つの秘密を隠していたのです……というように、サン・テグジュペリの想像力を刺激する家であつたのである。

一九〇九年十月、マンスのジェジュス派の聖職者経営のサント・クロア・コレール・ロンのモンゴレ・コレージュへ移り、一学期を終えると、スイスのフリブールのマリア司祭会経営のサン・ジャン・コレージュに転じている。そして一九一二年、十二歳の夏休みのとき、

サン・モリス・ド・ルマンの近くにつくられた飛行場で、ジュール・ヴェドリヌという当時国家的英雄となつていた飛行士に、はじめて飛行機に乗せてもらう。これをきっかけに、航空熱が深く根を下ろしたに違いない。

一九一七年、弟のフランソワが心臓リウマチに冒されたためにフランスに帰る。まもなくフランソワは他界。フランソワは、二つ違いで人なつこく生まじめで鋭い感受性にめぐまれた子供だっただけに、サン・テグジュペリにとって、一も二もなく分身の一人であつた。

一九二一年(二十一才)、兵役に召集される。この年と翌年に、まず民間航空士、次いで空軍操縦士の資格をとり、飛行家として第一歩を踏み出す。一九二三年一月、ブルジェ飛行場での不時着事故で頭蓋骨折。三月、除隊する。

一九二六年四月、文芸誌『銀の船』にはじめての作品『飛行家』が掲載される。十月、ラコテール航空会社へ操縦士として採用される。一九二九年、『南方郵便機』が出版される。十月には、アルゼンチンの郵便会社の支配人となり、ブエノスアイレスへ赴任。南米大陸最南端ブエータ・アレナス・ブエノスアイレス間の空路を開く。一九三一年、コンスエロ・スンシンと結婚。小説の第二作『夜間飛行』がフェノミナ賞をうける。

一九三四年四月、エール・フランス社に入社。宣伝役を引きうけ巡回講演のために各地旅行。そして、翌年、十二月二十九日二十三時、パリ・サイゴン間の航空記録樹立を試みて、ベンガジを離陸して四時間後、リビア砂漠のどまんかに墜落、幸いに生命には別状はなかつたものの、愛機は破損。再起不能。三十日も三十一日も

無人の砂漠彷徨。年が変って、一月一日の午後六時、餓死の一步手前でようやく救出される。そしてまた、一九三八年一月、ニューヨーク州ホーン岬の長距離飛行に挑戦。グワテマラで離陸に失敗し、墜落。死の寸前の大事故を起す。

一九三九年二月、『人間の土地』出版する。これが、四月に、アカデミー・フランセーズ小説大賞を受ける。六月、英語版『人間の土地』がベストセラーとなる。八月、戦争の切迫を感じ、急いで帰国。九月三日、英仏・独開戦。九月四日、召集され、予備大尉となる。十一月三日、二の三三偵察飛行大隊に配属される。一九四〇年、五月十日、ドイツの電撃戦始まり、フランス軍大敗走。五月二十二日、アラス上空を偵察飛行し六月、戦功表彰を受ける。二十二日独仏休戦。八月五日、除隊になり帰国。十一月はじめ、マルセイユを発ち、アルジェ、リスボンを経由して、アメリカへ向う。十二月三十一日、ニューヨーク着。

一九四一年、アメリカの客となる。十二月にアメリカが参戦する。一九四二年二月、『戦う操縦士』出版される。十一月八日、米英連合軍、北アフリカに上陸。一九四三年二月、『ある人質への手紙』出版される。四月六日、『星の王子さま』出版される。四月十日、北アフリカ行き軍用船に乗船。六月四日、二の三三大隊へ復帰を果たす。六月二十二日、少佐に昇進。七月二十七日、七週間の操縦訓練を終え、はじめてフランス上空への偵察任務につく。八月一日、二回目の出撃のとき、エンジンの故障が起こり、引き返してきての着陸で、操作を誤り機体を破損させる。十二日、予備役にまわされる。一九四四年、五月十六日、五回以上の偵察飛行を行なわないう条件で原隊に復帰する。七月十七日、コルシカ島、バステアの南、ボ

ルゴに移動。三十一日、グルノーブル・アマンシイ地方偵察の目的で、午後八時半離陸したまま行方不明となる。

## 第二節 『星の王子さま』出版について

この作品は、一九四三年、第二次世界大戦の最中に書かれたものである。この時、作者はアメリカの客となっていた。故国フランスがナチスドイツの侵すところとなっていたことがもとで、亡命の身の上になったからである。

ニューヨークのレストランで、サン・テグジュペリがいたずら描きをしているのを目にとめた出版社の社長がそのわけを尋ねると、「自分のなかにはこんな子どもが住んでいる」という答えが返ってきたという。そこで、彼はサン・テグジュペリに、本人が思いもかけなかった提案をし、クリスマス用の子ども向けの書物を書くように依頼したのである。

時期おくれで完成したこの作品は、故国で苦しんでいる作者のユダヤ系の友人、レオン・ウエルトに捧げられた。この友人に作者は、「或る人質への手紙」という冊子を送り、おそろしい戦争からの避難を見いだそうとした。しかし、事はそれだけでは足りなかった。航空に一身をうち込んでいた彼は、どうかすると、二度とこの世でくだんの友人と顔を合やすこともできなくなるかも知れない。だとすれば、言わず語らずのうちに築かれている友情だけではなく、たましいそのものを、形見にして遺さねばならぬ。そう思ったあげくに書かれたものである。

## 第一章 飛行士と王子さまとの対話

### 第一節 飛行士との出会い

飛行士は、サハラ砂漠に不時着し、そこで王子さまと出会う。そして、こう言われる。「ね……ヒツジの絵をかいて！」

飛行士は、絵はかけないと断るが、再びたのまれて、象のみこむウワバミの絵をかく。この絵は、子供の時に書き、大人に見せて「これこわくない？Vときくと、△ぼうしが、なんでこわいものかVと言われた絵である。この絵を、王子さまは、「ウワバミにのまれているゾウなんか、いやだよ」と一目見ただけですぐに理解する。これまで、飛行士は、ものわかりのよさそうな人に会うと、この絵を見せた。しかし、誰もが△をいつあ、ぼうしだVと答えるだけだった。だから、飛行士は、その人の気に入りそうな話（ゴルフや、政治や、ネクタイといった話）をした。飛行士は、親身になって話をする相手がみつからずに、ひとりきりで暮らしていたのである。そして、ヒツジの絵をかくが、王子さまは気にいらぬ。投げやりになってヒツジの箱の絵をかき、「こいつあ、箱だよ。あんたのほしいヒツジ、その中にいるよ」といい見せると、やっと王子さまは気にいってくれる。

この二つの絵に対する王子さまの態度によって、王子さまの大事なものを見ぬく目の曇りのなさを知り、すっかり感心した飛行士は自分が長い間求めつづけていた本当に物のわかる人として王子さまを認め、王子さまに親愛の気持ちを抱くようになる。

この「ゾウを飲み込むウワバミの絵」は、事物の見えざる意味の開示という、この物語の主要テーマの予示なのである。そして、大

人はこの絵を理解できない。それは、本末顛倒の先入見に、たいいてとらわれているので、相手の立場にたつて物事をみるのが不可能だからである。だから、形にとらわれて「なんで帽子がこわいものか」となる。ただ、年齢的、肉体的に子供であっても、ウワバミの内側の見えないものは、小さな大人でしかない。王子さまと飛行士とのあいだの絵の解釈の一致は、この両者のなかに宿る子どもの一一致の象徴である。

こうして、飛行士は、親身になって話し合える人と出会うわけである。

### 第二節 王子さまの秘密

飛行士は、王子さまと親しくなつて、王子さまが星から来たこと星のこと、その星を出てきたこと、その星に生えるバオバブのことを知るようになった。そして、一日に日の入りを四十三度もながめずにはいられないほど、悲しいときがあったことも知つた。王子さまのもっている秘密を五日目に知ることができた。

それは、飛行士が、飛行機の修理をしているときに、王子さまが「トゲは、いったい、なんの役にたつ」と聞いた。しかし、飛行士は、修理のことで頭がいっぱいなので、いかげんな答えをした。そのことに王子さまは、反論し、「まるで、おとなみたいなのさきようをする人だな！」という。そして、「それで、ヒツジが花をくうのは、その人の星という星が、とつぜん消えてなくなるようなものなんだけど、それもきみは、たいしたことじゃないっていうんだ」といって泣き出す。そして飛行士は、どんなことになつても王子さまをなぐさめようと思ひ、王子さまと同じ気持ちになろう

とする。

飛行士は、王子さまにバラのとげのあるわけをいいかげんに返事をした言い訳に、「でたらめに返事したんだ。とてもだいたいなこと、頭にひっかかっているんでね」という。王子さまにとって、大事なものは、星に残して来たバラの花であり、その花が無事であるかどうかということ、飛行機のポールのとははずすことの大切さは同等ではない。そこで、「まるで大人みたいな口のききようをする人だな!」という言葉をなげかける。飛行士は、ここで、はつとす。王子さまは、バラがヒツジにくわれる不安、バラの重要さをつたえる。

飛行士は、やつと王子さまの気持ちを理解するのである。飛行士は、王子さまのバラに対する気持ちの重大さに気づこうとすることがなく、自分の今しなければならぬポールのはずすことに一生懸命であった。つまり、目先のことにとらわれていて、飛行士は本当のことを見ていない。このことに気づいた飛行士は、はずかしく思う。そして飛行士は、王さまをなぐさめるのである。

——のどがかわいても、死ぬ思いをしても、そんなことは、どうでもよいことでした——飛行士は、王子さまの不安を感じとった。そして、自分が、本質的な問題に立ち向うべく王子さまをなぐさめる。王子さまの気持ちにならうと努めるのである。

サン・テグジュペリは、人間同士のあいだの友人とは、おそらくよそでは開くことのない戸を、心から相手の身になって開く少数の人のことではない。何人にも開かれる戸、世にいう仲間とは、結局そんなものだと考えていた。つまり、飛行士は、ここで王子さまに対し、親しきをもつ人物から友人という風に変ったのである。王

王子さまもまた、バラの話を飛行士だからいうことができたのだ。飛行士は、ソウを飲みこむワウバミの絵とヒツジの入った箱の絵がかけることより、物の本質を見抜くことのできる人物と王子さまが認められたためである。ここで、王子さまは、飛行士という友人をうることができたのである。

## 第二章 星への旅

### 第一節 バラについて

前章で、王子さまの話にでてきたバラは、王子さまの星に、どこからか飛んできた種が芽をふいた花だった。とても美しい花だった。しかし、花はその美しさをはなにかけて王子さまを苦しめた。風の吹いてくるのがこわいからついたてをたてるとか、夕方には覆いガラスをかけるなどとうるさくいたり、すぐにばれそうなりそうをついたりする。こんなしうちをされても王子さまはバラを愛している。そして、どうかしてバラの心を知ろうとするが、どうにも手のつけようがなく、憂鬱な日を送りがちになり、考えあぐんだあげく、「親身になって話をする相手」を探すため旅にでる。

バラは、美しさをはなにつけて、吹けば飛ぶような弱々しい心をもっているが、四つのトゲを物体そうに見せかけて、人を人とも思わぬ振舞をする。弱々しい心をもっていることを王子さまはわからなかった。というのも、旅に出たのちキツネに教えられる「大切なことは目に見えない」ということがわかっていないからだ。だから、王子さまは、バラのことを真正面にうけとり傷ついたのである。

王子さまが、バラにひかれたのは、ホロリとするほど美しい花で

よいにおいがしたからである。バラがうぬぼれであるとか、気まぐれであるといった欠点に目がいき、その美点を味わうことができなかった。そして、バラのもたないものを求めて、彼女(バラ)をも自分をも苦しめていた。彼女の美点を認めて、愛することが必要であった。だから王子さまは、「ぼくは、あんまり小さかったからあの花を愛するってことがわからなかったんだ」と飛行士に告げたのである。

## 第二節 へんな大人たちの星

バラとのいさかいで、自分の星を出た王子さまは、第一の星、王さまが住んでいる星を訪れる。王さまは「やあ! 家来が来たかな」と王子さまにいう。この王さまにとって、人間はみんな家来である。王さまは、自分の威光に、きずがつかないことを大切に思っていた。ただ、無理な命令はしなかった。だから、自分はみんなを服従させる権利があると思っていた。王子さまが、この星にいても何もすることがないので旅に出るといとうと、王さまは、法務大臣にするから、この星にいろという、裁判しなければならぬような人はだれもいないと断られると、自分自身を裁判したらよいと、どこまでも無責任である。そこで王子さまは、「もし、陛下が、どんなときにも、陛下らしくなさるおつもりでしたら、ぼくに、むりのない命令を、おくだしになるはずなんだがなあ。どうでしょうか、ぼくがすぐ出発するように命令なすっては。つごうよくなっているように思うんですけど……」それで、王さまは、「そのほうを、大使にするぞ」といばった顔をしている。「おとなって、ほんとうにへんなものだなあ」と、王子さまは旅をつづけながらつぶやく。

王さまは、やくにも立たぬ支配権を後生大事に握っているきりである。そのことを王子さまは見抜いているので、夕日が見たいのでお日さまに沈めと命令してほしいとたのむ、王さまは虚をつかれるが、そのぶざまさを押しかくそうと、なんとかその場を切りぬけようとする。まわりにいくらでも転がっている人物である。

また、王さまは政治家を風刺したものであることは明らかである。万事は自分の手中にあると見せかける身振りがうまいので、人々は彼らについて期待をかけがちである。しかし、現状を変えようとする意志も指導力もなく、自然そうなたにすぎないことを自分がしたかのように売り込み、都合の悪いことはわかったようなわからぬような理屈でごまかし、ただ自分の地位や体面を守ることのみ熱心な手合である。このうえなくあてにならない存在だと、作者はいつているように見える。

第二の星には、うぬぼれ男が住んでいた。「おれに感心している人間がやってきたな」と王子さまを見るといった。うぬぼれ男の都合は、みんなは自分に感心していると思っていた。王子さまにも感心してほしくて手をパチパチとたたかせる。そして王子さまに、「感心するってのはね、それがこの星のうちで、一ばん美しくって一ばんりっぱな服を着ていて、一ばんお金持ちで、それに一ばん賢い人だと思ふことだよ」という。王子さまは、「でも、人に感心されるのが、なんで、そうおもしろいの?」といいこの星を去る。

サン・テグジュベリによれば、虚栄とはうぬぼれというだけでは足りない。まごうかたもない狂気の沙汰であるという。

うぬぼれ男は、たった一人しかいない世界において、「一ばん」といつている。世界に目をふさぎ耳を閉ざして人はうぬぼれる。目

と耳は、自分に感心していると思われる人だけが見え、ほめてい  
ことばだけが聞こえればよい。これはまったく狂気の沙汰である。  
そして、それは、なんの意味をもたない。そのことに気づいた王子  
さまは立ち去り、おとなって、ほんとうにへんだな、と思うのであ  
る。

三番目の星には、呑み助が住んでいた。王子さまはここを訪れた  
後に、ひどく気がしずんでしまう。呑み助に、酒を飲むわけを尋ね  
ると、「忘れたいからさ」と、呑み助は答える。「忘れるって、な  
にをさ？」と王子さまは気の毒になってきくと、「ほくかしいのを  
忘れるんだよ」とうちあげた。「ほくかしいって、なにが？」と王  
子さまは、相手の気持ちをひきたてるつもりできくと、「酒をのむ  
のが、ほくかしいんだ」というなり、呑み助は、だまりこくつてし  
まう。そこで王子さまは、当惑してそこを去る。

呑み助は、悪循環をくり返している。他の人格を否定するだけで  
なく、自分自身までも拒否している。自分自身の良心をぎりぎりの  
ところまで追い込もうとあせりながら自分自身を破壊していく。王  
さまやうぬぼれ男と同じように、自分自身から外へ出ようともして  
いない。もっと悪いことに自己反省をしようともしていない。これ  
は、呑み助が、傷つきやすさを演じるため酒を飲んでいいるからであ  
る。他人のできないことをしているつもりで得意であったのであ  
る。王子さまは、この浅ましさに気が沈んだ。そして、おとなっ  
て、とつても、おかしいんだなあとおち去る。

四ばんめの星は、実業家の星でした。彼はいそがしいので王子さ  
まがきても顔をあげない。そして、星の計算をつづけている。王子  
さまが何を計算しているのかきくと、「ときどき、空に見える、あ

のちっちゃなものさ」と答える。これで王子さまは、「ああ、そう  
か星のことだね」という。そしてたくさん星をどうするかとき  
くと、「どうもしやせん、持つてだけさ」という。星をもつてい  
て何の役に立つかときくと、「金持ちになるのに役だつよ」という  
「金持ちになると、なんの役に立つの?」「だれかが、ほかの星を  
見つけたしたら、そいつが買えるじゃないか」と呑み助と同じ理屈  
をいう。そこで、王子さまが、「でも、その星、どうしようって  
いうの?」という「管理するのさ、いくつあるのか、かんじようす  
るんだ」、そして、銀行に星をあげることができるといなが、そ  
れは、紙を引出しの中に入れて、かぎをかけておくにすぎない。そ  
して王子さまは、「ほくはね、花を持つてて、……ほくが、火山  
や花か持つてると、それがすこしは、火山や花のためになるんだ。  
けど、きみは、星のためには、なつてやしない……」これには、  
実業家は答えることができない。そこで王子さまは立ち去る。

実業家は、たくさん星をもっている(と思つていただけだが)  
が、ただもつていただけである。それゆえ、人間らしさは少しも感  
じられない。そして、彼は、現代の石油資本家とおなじように、自  
分が取り扱う直接の対象そのものは意識のなから消え去り、それ  
と取つて替わつた数の言葉だけがひとり歩きしている。彼は、星の  
美しさを求めるのではなく、数を大切にしてい人物である。物事  
の本質を見抜く目というものはもちあわせていない。

サン・テグジュベリは、時として、修道院生活の物静かさに心ひ  
かれることがあつた。それでいて、所有財産にたましいを奪われて  
自分自身を、自由と富の独占者と思ひこんでいる我がまま勝手な連  
中に楯つくことがあつた。といつても、彼が見くびつたのは、人間

の財産そのものでなくて、ひとえに財宝を積むことに急で、精神的陶冶にまったく無頓着な金融家にほかならなかつた。

五ばん目の星は、街燈と点燈夫がいられるだけの場所しかない小さな星だつた。王子さまは点燈夫の仕事を、「街燈に火をつけるのは、星を一つ、よけいにキラキラさせるようなものだ。でなかつたら、花を一つ、ぼっかりと咲かせるようなものだ」と思う。点燈夫は、一分間に一度、火をつけたり、消したりする。命令だからである。星は一年まじに早くまわるが、命令はかわらないからである。王子さまは、こんなにも命令をよくまもる点燈夫がすきになつたので、休む方法としてゆっくり歩くとすきなだけ昼間がつづくと教える。しかし、点燈夫が、好きなことは眠ることだと答える。王子さまは、また旅にでるが、こう考える。「ぼくは、あのひとだけ、友だちにすればよかつたなあ。だけど、あのひとの星は、あんまり小さすぎる。ふたり分の場所もない星なんだもの」点燈夫は、火を消すのもつけるのも、命令だよと口癖のようにいう。命令を忠実にまもるといふ固定観念にすがつていきている。ただ、王子さまは彼が自分のことでなくほかのことを考えていることに好意をもつた。しかし、点燈夫は王子さまがこつけいにみえない唯一の人物であつたが、積極的に友だちにしないでほならない、それ以上の価値を与えるものではなかつた。それは、点燈夫の存在が人と人とのつながりとはまったく無縁だつたからだ。

六ばん目の星は、何冊も大きな書物をかいて年よりの先生がいた。その先生は王子さまを見るなり、「ほう！探検家だな」と叫びました。そして自分が地理学者だと告げて、王子さまにどこからきたか、王子さまの星のことかをきく。だから王子さまは、火山

が三つあつて花も一つあると答える。すると、地理学者は、「わたしたちは花のことなんか書かんよ」という。そして、「花つていうものは、はかないものなんだからね」とつづける。それで、王子さまは、はかないの意味をしつこくきくと、「そりゃ、八そのうち消えてなくなる√つていう意味だよ」と答える。王子さまは、自分の花がいつか消えてなくなると知り、花をなつかしく思う。そして地理学者のすすめにより、地球へ出かける。

地理学者は、その仕事を王子さまに最初感心される。海や川や、町や山や、砂漠がどこにあるのかを知っていると思へば、人間とのつながりのある事物の所有者と向き合つていことになるからだ。しかし、その知識は、探検家の話だけによるのである。決して、自分で歩いてみつけた知識ではない。その間接的な知識を真の知識と感違いしている。だから王子さまは拍子抜けする。そして「はかないもの」は地理学者にとつて注意に値しないものとなる。生きていく人間の運命には鈍感で、死んだ事物の知識のほうをありがたがる学者たちが、批判されている。「はかない」は王子さまの心の世界に關係のあることばであり、花は、「はかないもの」で消えてなくなるものだ地理学者は、王子さまに教える。それゆゑに、「地球を見物しなさい、なかなか評判の良い星だ」といわれるままに地球へ出かけるのである。

### 第三章 キツネとの対話

#### 第一節 飼いならす

地球に降りた王子さまは、蛇や小さな花に会つたのちに、バラの花がいっぱい咲いている庭にたどりつく。自分の花は世界にただ一



つの花と思つていたのに、そうではなかった。王子さまは、口惜しさに草のうえにつつぶして泣く。そこへキツネが現われた。

「ほくと遊ばないかい？ほく、ほんとにかなしいんだから……」

と、王子さまはキツネにいうと、「おれ、あんたと遊べないよ。飼いならされちゃいけないんだから」と、キツネは答えた。そこで、王子さまが飼いならすの意味をきくと、キツネは、「よく忘れられることだがね。△仲良くなる√っていうことさ」と答える。仲良くなるとは、キツネのことばを借りると、「おれの目から見ると、あんたは、まだ、いまじゃ、ほかの十万もの男の子と、べつに変わりのない男の子なのさ。だから、おれは、あんたがいなくなつていいんだ。あんたもやっばり、おれがいなくなつていいんだ。あんたの目から見ると、おれは、十万ものキツネとおなじなんだ。だけど、あんたが、おれを飼いならすと、おれたちは、もう、おたがいに、はなれちゃいられなくなるよ。あんたは、おれにとって、この世でたったひとりのひとなるし、おれは、あんたにとって、かげがえのないものになるんだよ……」ということである。

キツネは、不特定多数からえらび取られた者は、愛なり友情なりの固い関係によつて結ばれなければならぬと説く。「飼いならす」とは、相互のきずなをつくり出し、より強めることである。

また、「飼いならす」とは、△仲よくなる√ということを意味するが、それだけではなく、仲よくなるには辛抱が必要であること、とりわけ印象づけることをねらつたことばである。キツネは仲よくする方法として、こういう。「しんぼうが大事だよ。最初は、おれからすこしはなれて、こんなふうに、草の中にすわるんだ。おれは、あんたをちよいちよい横目でみる。あんたは、なんにもいわ

ない。それも、ことばっていうやつが、勤ちがいのもだからだよ。一日一日とたつてゆくうちにや、あんたは、だんだんと近いところへきて、すわれるようになるんだ……」

いろいろ案じながら横目で見ることは、対象の奥行きを広げ、隠れている多くの共感の相に気づかせる。あるいは、別のいい方をすれば、きずなをそのつどふやして、何重にも太くしていく。それゆえに、一日一日とたつうちに、より近くにすわつても相手は逃げなくなる。そしてキツネは、「いつも、おなじ時刻にやってくるほうがいいんだ。あんたが午後四時にやってくるとすると、おれ、三時には、もう、うれしくなりだすというものだ。そして、時刻がたつにつれて、おれはうれしくなるだろう。四時には、もう、おちおちしていられなくなつて、おれは、幸福のありがたさを身にしみて思う」という。もとは十万もの他の同類と変わりのないものであつたのに、おたがいにもう離れてはいられなくなる。おたがいがおたがいにとつて、この世でかげがえのない唯一のものになる。

時間をかけて、かげがえのないものにするということによつて、たったひとつしかなくても、それが他のすべてのものと同じ意味をもつということである。たったひとつのもの、一人の人でしあわせになれる、とはそういうことである。キツネは、こうもいう。「だけど、あんたのその金色の髪は美しいなあ。あんたがおれと仲よくしてくれたら、おれにやそいつが、すばらしいものに見えるだろう。金色の髪をみると、あんたを思い出すだろうな。それに、麦を吹く風の音も、おれにやうれしいうらな……」相手を思い出させるものなら、どんなにさいいなものもよるこびとなる。自分の受け取り方によつて、同じものが、別のものに変身する。「飼いならす」

はそういう変化をもたらすものである。そして、たった一人でも友達ができることは、世界が喜びと豊かさに変わることを可能とするのである。そして、そこに「飼いならず」意義があるのだ。

## 第二節 心でみなくちャものごとはよく見えない

キツネと別れるときが来ると、キツネは、「ああ……きつと、おれ、泣いちゃうよ」という。その言葉より、王子さまは「じゃ、なんにもいいことはないじゃないか」という。キツネは、「麦はたけの色があるからね」という。「飼いならず」ことにより、今まで（王子さまと出会うまで）、キツネにとって何の意味もない麦ばたけが、王子さまとのつながりを示す大切なものとなる。

そして、キツネは、王子さまに、もう一度、バラを見にゆくようすすめる。王子さまはバラを見にゆき、そこで自分の星に残してきたバラが、この世に二つとない花だと気づく。そして、こういう、「あんたたちは美しいけど、ただ咲いてるだけなんだね。あんたたちのためには、死ぬ気になんかなれないよ」そして、自分のバラに、水をやり、覆いをかけ、不平を聞き、いろいろと世話をし、自分のものになった花だから、他のバラたちよりも、大切なんだという。これまで、自分の星に咲いていたバラの花を大切に思っていたのは、数字の上で世界にたった一つしかないバラと念<sup>ねん</sup>っていたからだ。しかし、本当は、王子さまが世話をすることによってきずなをうるることができたバラだったからだということに、今、気がついている。「するそうなるまいはしているけれど、根は、やさしい」ことがわかってる王子さまのバラは、ただ咲いているにすぎない気心の知れない五千のバラに当然まざる。だから、王子さまは精神

的に満たされる。

王子さまは、キツネのところにもどって、別れをつけると、キツネはこういった。「心で見なくちャ、ものごとはよく見えないってことさ。かんじんなことは、目に見えないんだよ」

仲よくなることによって、心の中につくられる、いろいろな意味での満たされた事物の奥行きの世界は、表面では知ることはできない。心で見ることによって、はじめて心の中のものをみることができ。

目でなく心で見ると、というのは、はじめは見えないもの、そこにはなかったものがそのつもりで見ていると、見えてくるということである。それはこれまでわからなかったことが、新しくわかっていくことである。また、もともとそこになかったはずのものが、新しくそこに生まれてくることもある。大切なものは、そのものの奥深くにかくされているようにも見えるが、本当は友情や愛などのように、新しくそこに生まれ出てくるのである。

この後、転轍手に会う。そして、特急に乗っている旅客について話し合う。転轍手が、「なんにもおっかけてやしないよ。あの中で眠ってるんでなけりゃあ、あくびしているんだ。子どもたちだけが、窓ガラスに鼻をびしゃんにおしつけているんだよ」という。王子さまは、「子どもたちだけが、なにがほしいか、わかっているんだね。きれいでできた人形なんかで、ひまつぶしして、その人形を、とてもたいせつにしているんだ。もし、その人形をとりあげられたら子どもたちは、泣くんだ……」という。「子どもたちは幸福だな」と、転轍手がいっただ。

王子さまは、真に孤の言葉<sup>うらな</sup>を理解している。子供たちが幸福なの

は、彼らだけが何が欲しいかわかっていることよってであり、それは彼らが飼ひならした人形をもっているからである。飼ひならしたものをものにとつては、自分のとるべき行動に迷ひはない。人形が取り上げられたら、子供たちは泣く。バラが危機にあることを知る王子さまは、ふるさとの星へ帰らねばならないことをただちに理解する。つまり、自分の旅の目的、自分が求めている対象、それが啓示する空間の意味は明確となつているのである。

#### 第四章 飛行士と王子さまとの対話

##### 第一節 井戸を探す

飛行士は、いろいろと話しかける王子さまに、のどがかわいて死にそうだから、話をしていゝ場合でないという。「死にそうになつても、ひとりでも友だちがいるのは、いいものだよ。ぼくはね、キツネと友だちになれて、「ほんとうにうれしいよ」というが、飛行士の心のうちを思ひやつたように「ぼくも水がみたいから……井戸をさがそうよ……」という。そして、飛行士は、いきあたりばつたり井戸をさがすなんて、ばかげたことと思うが、探しにいく。

途中、飛行士は、「水がのみたいの、きみも？」と王子さまにきくと、「水は、心にいいものかもしれないな……」という。しばらくして、王子さまは、「星があんなに美しいのも、目に見えない花が一つあるからなんだよ……」といい、「砂漠は美しいな……」といい、つづけて、「砂漠が美しいのは、どこかに井戸をかくしているからだよ……」という。

王子さまの、「たとえ死ぬことになるとしても、友人を持つのはよいことだ」には、星に残してきたバラのために死ぬ決意が含まれ

ている。そして、生死に関わりなく、友だちがいることはいいことだという。たとえ死にそうになつても、もし友達がいるなら、たとえ友達のために死の危険をおかすことだつてありうる、というのである。それが、キツネの別れのときのことは、「めんどうをみたあいてには、いつまでも責任があるんだ」を王子さまは本当にかつているのである。

そして、「水は、心にいいものかもしれないな……」、「砂漠が美しいのは、どこかに井戸をかくしているからだよ……」この水は、のどをうるおすための水ではなく、精神的意味の水である。精神的な渇きをうるおす水のことである。そして、この場合、王子さまはのどがかわいていないので、飛行士のせつばつまった状況を理解することが難しい。そこで、飛行士と同じようにくたびれ、渇くために井戸を探す。ここで、井戸がみつかつて、水を飲むことができたとき、飛行士の気持ち理解できると考え、水は心によいという結論がでてくるのである。

「砂漠が美しい……」というのは、今のべた意味をもつ水をたたえた井戸が、砂漠に存在しているからである。そして、その存在が、砂漠を輝く空間に変貌させはじめていゝ。砂漠は、「なんにも見えます、なんにも聞こえません」といった単調な空間が、王子さまの指摘によつて、飛行士によつて変化しはじめる。そして、飛行士は砂漠の美しさの秘密がわかつて、子供の頃を思ひ出す。古い家に住んでいたことがあつて、その家に宝が埋められてるといゝ、いい伝えがあつた。だれも発見したこともなく、探そうとしたこともなかつたが、その宝で、美しい魔法にかかつていゝようだったのだ。そして、飛行士は王子さまにいう。「そうだよ、家で

も星でもその美しいところは、目に見えないのさ」子供時代の思い出が、渴きや井戸を肉体の関係で考えていた飛行士のなかの△大人▽を消し去り、彼のうちの△子ども▽を甦らした。そして、王子さまがうれしいな、きみが、ぼくのキツネとおんなじことをいうんだから」という。

王子さまが眠りかけたので、飛行士は、王子さまの寝顔をみながら、一ばんたいせつなものは、目に見えないのだ……そして、王子さまを愛しく思うのは、一輪の花をいつまでも忘れずにいるからだと考えながら歩いていくと、夜が明けるころに、井戸を発見する。

飛行士は、王子さまが、自分は安全だからというので、死ぬことになっても友達がいるほうがよいというような無責任なことをいったのだと考えていた。しかし、王子さま自身が心からすべてに優先して、バラのことを考え、バラのためならばほんとうに死んでもよい気なのだということを、飛行士は認めないわけにはいかない。無責任なことをいったのではなく、王子さまの本心をそのままいつていたのだ。飛行士は、そういう王子さまをかげがえない宝物のよういとおしく思う。

## 第二節 飛行士との別れ

井戸を見つけたが、それはサハラ砂漠にある井戸のようではなく飛行士はまるで夢を見ているような気になる。水をくむと、王子さまは、「ぼく、その水ほしいな。のましてくれないか？」という。飛行士は王子さまが何を探していたのかを理解する。そして、心でさがす話をしたあと、王子さまは、飛行士に口輪をかいてくれる約束を守るようにいう。飛行士はそれをかいてわたすと、王子さまは

「ね、ぼくは、この地球におりてきたら……あしたは一年めの記念日なんだよ……」という。飛行士はへんに悲しくなる。そして、人の住んでいるところから千マイルも離れた砂漠を王子さまがひとりで歩いてきたわけが、やっと理解できた気がするが、飛行士はなお半信半疑である。「ああ、ぼく、すこしこわくなった」と、王子さまはいう。

井戸の水は、たべものとは、べつのものであった。それは、飛行士が腕に力を入れて、汲みあげた水だったからだ。だから、なにかおくりものでも受けるように、しみじみとうれしい水だった。「心で見なくちゃ、ものごとはよく見えない」とキツネはいうが、心で見ている、あるいは見るつもりだけでは十分でないことがわかる。想像が有効に働くためには、基礎的な体験の蓄積も豊かでないとはならない。この意味で、水は王子さまの心を養った。たしかに、水は心にもよいものであった。飛行士の気持ちを理解することができたのだ。一方、飛行士のほうも、王子さまの探していたものを知る。

二人の心は通じ合ったのである。そこで王子さまがいう。「きみの住んでるとこの人たちったら、おなじ一つの庭で、バラの花を五千も作ってるけど、……じぶんたちがなにがほしいのか、わからずにいるんだ」「だけど、さがしてるものは、たった一つのバラの花のなかにだって、すこしの水にだって、あるんだがなあ……」「だけど、目では、なにも見えないよ。心でさがさないとね」

次の日の夕方、飛行士が仕事よりもどつてくると、王子さまは、こわれた石垣の上ですわって蛇と話している。飛行士はピストルをとり出そうと、ポケットのうちをさぐりながら、かけ出すと、蛇は逃げた。石垣からおりてくる王子さまを両腕でうけとめる。すると、

王子さまは、白い顔をして、心臓の鼓動は速くなっていた。飛行士は、王子さまの状態を蛇に出会ったこわさのためと考える。しかし、王子さまは、しっかりして、飛行士の飲ませてくれた水のうまさあらためて称え、自分が去ったのちは、星をながめてくれるよう頼む。「ぼくは、あの星のなかのついに住んだ。その一つの星のなかで笑うんだ。だから、きみが夜、空をながめたら、星がみんな笑っているように見えるだろう。」すると、きみだけが、笑いがらつづける。「ぼくは星のかわりに、笑い上戸のちっちゃい鈴をたくさん、きみにあげたようなものだろうね……」そして、今夜、来ないようにいう。その夜、王子さまは、出かけるが、飛行士はあとを追う。王子さまは飛行士の手をとって、つらい思いをするよといい、死んだようになるがほんとうではないのだから、この体は重すぎから持っていけないのだとか、古いぬげがらだから悲しむこととはないとか、さらに、いっしょに飲んだ水や星の話をつたたび持ち出して、飛行士をなぐさめようとする。が、飛行士がだまっていたと、王子さまもだまり、そして泣き出す。花のためにしなくてはいけないことがあるといい、少しもじもじした後、「さあ……もうなんにもいうことはない……」といい立ちあがり、ひとあし歩くと、王子さまの足首のそばを黄色い光が走った。そして、一本の木が倒れるように静かに倒れた。

王子さまは、バラのところに帰るために、死を選ぶのである。サン・テグジュペリは、かねてから、自分に生きた喜びを与えてくれるものためには、死ぬことができなければならぬと考えていた。自分が真に大切に思うものが滅んでしまつたら、生きていても何のかわらないということになつてしまふからである。キツネのこ

とばに、「めんどろみたあいてには、いつまでも責任があるんだ」とある。責任は死をかけることを要求する。だから、王子さまの死は、バラへの責任を果すためにおこつた。蛇にかまれて死ぬ恐しさ不安と、けなげにも懸命に戦つたのだ。そして、その自分自身の戦いに勝つて、バラのところへ帰つていった王子さまの姿は、想像しうる最もりっぱな生き方であると飛行士には思われた。

王子さまは、飛行士にいう。「人間はみんな、ちがった目で星を見てるんだ。旅行する人の目から見ると……だけど、あいての星はみんな、なんにもいわずにだまってる、でも、きみにとっては、星が、ほかの人とはちがったものになるんだ……」二人の間には友情がめばえている。そして、たいせつなことは目に見えないということがわかつている。飛行士にとって星は、王子さまとの思い出が含まれていることを意味する。王子さまは、飛行士との別れに際し、星を見る喜びを贈るのである。そして、こういう、「それに、きみは、いまにかなしくなつたら——かなしいことなんか、いつまでもつづきやしないけどね——ぼくと知りあいになつてよかつたと思うよ。きみは、どんなときにも、ぼくの友だちなんだから、ぼくといっしょになつて笑いたくなるよ」王子さまの死の決意は、悲愴なものではない。星に帰るために必要なものであり、バラのもとへ帰ることができる。そして、王子さまと飛行士との友情は、決して、途絶えることのないものである。彼らは、真の友情を手に入れたのだ。

王子さまは、自分がいま冒そうとしているものが死ではないかのようにいう。「ぼく、もう死んだようになるんだけどね、それ、ほんとじゃないんだ」「ね、遠すぎるんだよ、ぼく、とてもこのから

だ、持ってけないの。重すぎるんだもの」「でも、それ、そこらにほうりだされた古いぬけがらとおんなじなんだ。かなしかないよ、古いぬけがらなんて。」

だから、王子さまの死は、自然で、夢の中のできごとのようだった。そして、王子さまの体は、夜があげたときどこにもなかった。無事に星へ戻れたと、飛行士は信じずにはいられない。

人の住む世界に戻った、飛行士は、王子さまのいうとおり、夜に星をながめる。王子さまが、ヒツジがバラをたべないように見張っているとすると、空の星がたのしそうに笑っているように見える。また、ヒツジが、バラをたべることがあつたらと思うと、空の星が涙に変わる。飛行士にとって星空は、大人たちが見ることのできない、愛によってめざめた詩的内的空間をなしている。王子さまによって魅<sup>よみかえ</sup>らされた子どもが彼のうちに確実に宿っているからである。

### おわりに

私は、この卒業論文をおえて、この作品は思っていたよりもはるかに大きな意味をもった作品であることを感じている。私は、この作品を最初に読んだとき、物事があるがままに見ることのできる童心の素晴らしさに感動した。しかし、今は、それだけでなく、王子さまがバラとの責任を果たしたこと、キツネとの対話の中にてきた飼<sup>か</sup>いならすことのもたらす意義、心で物事を見るときに感動している。そして、これらは人間にとって大切な事柄であると思う。そして、現代社会において、「心で見ると」ということは忘れられているように思う。王子さまが、自分のバラを大切に思っていたのは、教の上で世界にたった一つしかない花だと誤解していたよう

に、本当の価値が数字によってはかられる傾向があるからだ。

### 参考文献

- 『星の王子さま』サン・テグジュペリ 内藤濯訳 岩波書店
- 『星の王子とわたし』内藤濯 文芸春秋
- 『星の王子さまの秘密』山崎庸一郎 彌生書房
- 『星の王子さまの世界』塚崎幹夫 中央公論社
- 『星の王子さまをフランス語で読む』加藤恭子 PHP研究所
- 『ファンタジーの発想』小原信 新潮社

### 〔評〕

読了して、よい研究の成果ができたことを喜ぶ。研究者自らの深い感動と理解が生れると共に、その象徴性、想像性が、真理を開示するものに肉迫していることを知る。当初、聖書をよく読むように指導した。汲めども尽きぬ泉の解釈が我流<sup>こゝろば</sup>におちいらないうために、真正なる教会で説き明かされる言に聴き入ることが肝要となるであろう。

一九八八年二月廿二日

寺田芳徳